

2024年市民活動重大ニュース【分野:反戦平和】

	月日	項目	解説	執筆者
1	2024年1月16日	旧広島陸軍被服支廠の保存決定	<p>広島に残る最大規模の被爆遺構「旧広島陸軍被服支廠」(広島市南区)の現存する4棟の保存が決まり、1月19日に国の重要文化財に指定された。</p> <p>被服支廠は、兵士の軍服や軍靴の製造や貯蔵などの施設として1914年に建てられた。広島原爆爆心地から2.7kmにあり、原爆の爆風で変形した鉄の扉などが残る。被爆直後には臨時救護所になり、多くの被爆者が治療を受けたり、死亡した場所である。</p> <p>戦後は高校の教室や運送会社の倉庫などに使われてきたが、2019年に広島県は建物の耐震化などを理由に解体の方針を示した(現存する4棟のうち広島県が3棟、国が1棟を所有)。しかし、被爆者だけでなく若者グループや建築関係者などから「被爆の痕跡が残る貴重な場所」「建築物としても高い価値がある」などと解体反対運動が巻き起こっていた。</p>	橋場 紀子
2	2024年8月12日	在ブラジル被爆者・森田隆さんが死去	<p>森田さんは1924年(大正13)生まれ。1945年8月6日は、憲兵として勤務中に防空壕を掘る作業に向かう途中で被爆した。</p> <p>1956年、広島で営んでいた時計店の客からブラジル行きを勧められ、妻と2人の子を連れて移民。1984年に「在ブラジル原爆被爆者協会」を設立し、妻・綾子さんと2人で広大なブラジル各地に住む被爆者をまとめた。当時は在外被爆者への手当不支給などの援護格差や「国を棄てた、棄民」との根強い偏見があり、私費を投じて国や広島市などへの陳情や格差是正を求める裁判に取り組んだ。裁判の勝訴などを経て在外被爆者問題が一定の成果を見た後も、ブラジルで被爆劇を続け、ブラジル社会で被爆体験や核兵器廃絶を伝え続けた。</p> <p>サンパウロ市内には森田さんの功績を称え、名前を冠した高校があり、3月に学生たちから100歳の誕生日を祝ってもらったばかりだった。</p>	

2024年市民活動重大ニュース【分野:反戦平和】

	月日	項目	解説	執筆者
3	2024年11月25日 ～29日	米国によるウクライナへの対人地雷供与に被害者が抗議	米国政府が11月20日に対人地雷をウクライナに供与することを発表したことに対し、同兵器の被害者等は対人地雷禁止条約の第5回検討会議が開催されていたカンボジアのシエムレアプで「ウクライナに今日与えられた地雷は、明日ウクライナの子供を殺す可能性がある」「地雷は希望を消す」と、いかなる状況下でも対人地雷の使用を認めず、米国が移転の決定を覆すよう訴えた。米国は同条約に未加入だが、ウクライナは加入国。米国は2023年にはクラスター爆弾をウクライナに供与し世界のNGO等から批判を招いていた。	目加田 説子
4	2024年12月10日	日本被団協がノーベル平和賞受賞	日本被団協(日本原水爆被害者団体協議会)は1956年に結成された広島・長崎の被爆者の全国組織。「再び被爆者をつくるな」と核兵器廃絶と原爆被害への国家補償を求め国の内外で活動続けるほか、被爆体験の継承に取り組んできた。「核兵器のない世界の実現を目指して尽力し、核兵器が二度と使われてはならないことを目撃証言を通じて身をもって示してきた」として、被爆80年を前に平和賞を受賞した。授賞式には、30人の代表団を派遣。ブラジル・韓国の在外被爆者を含め80代、90代の被爆者がノルウェー・オスロを訪れ、現地で被爆講話やテレビ出演などにも臨んだ。田中熙巳代表委員は授賞式のスピーチで「核兵器の保有と使用を前提とする核抑止論ではなく、核兵器は一発たりとも持ってはいけないというのが原爆被害者の心からの願い」「核兵器も戦争もない世界の人間社会を求めて共に頑張りましょう」と呼びかけた。	橋場 紀子